

総合防除実践指標モデル（茶）

総合防除実践指標モデル（茶）は、都道府県等における総合防除実践指標策定を促進するため、総合防除を実践する上で標準的と考えられる農作業の工程における具体的な取組内容をモデルとして取りまとめたものです。消費・安全局植物防疫課が全国の技術情報やこれまでに各都道府県で作成された IPM 実践指標を収集し、栽培の特性を踏まえて原案を作成し、検討会での意見を反映して、策定しました。

また、「これらを実施していれば総合防除を実践している」と考えられるポイントに【重要】マークを付しています。マークを付した項目を実施している農業者を総合防除実践者とみなし、取組状況を簡便に把握することを目的としています。

なお、本モデルはあくまでも例示であり、作業時期等は静岡県を想定していることから、都道府県等が総合防除実践指標を策定する際は、本モデルの様式や内容にとらわれず、地域の栽培体系や現場での指導に即し、「予防・予察」に重点を置いた病虫害防除や雑草管理が実施しやすい内容としてください。【重要】マークの対象項目についても例示であり、【重要】マークの対象項目は総合防除実践指標を策定する都道府県等の任意です。

総合防除実践指標モデル（茶）

作型（栽培体系）により実践ポイントが異なる場合は、栽培体系に応じた総合防除実践指標を策定する必要がある。
 実践ポイントの記述は、指標モデルとして取りまとめたものであり、各都道府県等が実践指標を策定する場合には、各都道府県等の実情を踏まえて、農家段階で「○」または「×」が明確にチェックできるように具体的な記述とすることが望ましい。
 点数欄では、毎年度実施する必要がない項目に（ ）を付した。本項目については、実施した場合に加点し、その他の年度は「－」と記す。
 点数については、基本的に一実践ポイントにつき1点とすることが望ましいと考えるが、各都道府県等において特に普及・推進すべき管理ポイントがあれば、点数を2点とするような評価を行って差し支えない。
 また、地域段階での取組を評価することが望ましい実践ポイントについては、地域での取組が一定割合を超えるような場合に点数を2点とするような評価を行って差し支えない。
 チェック欄では、実施の場合は加点し、未実施の場合は0、農薬未使用等当該実践ポイントが当該農業者にとってチェックの対象外であった場合「－」と記す（例 温暖で凍霜害が発生しない地域の凍霜害防止対策）。
 合計の欄も、毎年度実施する必要がない実践ポイントのうち実施した実践ポイントの合計点数には（ ）を付けて区別することが望ましい（例 20（3））。

番号	判断	防除	時期	主な対象害虫・雑草	実践ポイント	点数	チェック欄		指標作成時の注意事項
							実施目標	実施状況	
1	予防		新植・改植時	病虫害全般	【重要】炭疽病、輪斑病、クワシロカイガラムシ等の対策として、常発地帯では、改植・新植する場合に抵抗性の強い品種を導入する。	(2)			都道府県が推奨する品種がある場合には明記して差し支えない。
2	予防		新植・改植時	雑草	植え付け時に各種資材や敷き草等で畝間等をマルチングし、雑草を抑制する。	(1)			
3	予防		幼木期	赤焼病	幼木期において、強風による発生を軽減するために、ソルゴーの間作や防風ネットの設置を実施する。	(1)			
4	判断		栽培開始前	病虫害全般、雑草	栽培開始前に、年間の具体的な病虫害、雑草の防除計画を立てる。生物農薬を利用する場合、生物農薬の特性、化学農薬の特性、生物農薬に対する化学農薬の影響、品種、時期、使用方法、関連技術等を情報収集し、防除効果を損なわないように留意する。	1			計画を立てるにあたっては、メーカー、農業者団体、都道府県の病虫害防除所、普及指導センター、試験研究機関等との連携を密にし、薬剤の性質や生物農薬の使用手法の技術等について、情報収集を行うことが重要と考えられることから、必要な場合はその旨記述して差し支えない。
5	判断	防除	秋整せん枝後	ハダニ類	多発した園地では、秋整せん枝後の休眠前又は休眠明けに薬剤散布等を実施する。	1			
6		防除	冬期	クワシロカイガラムシ、カンザワハダニ等	冬期にマシン油剤を使用する。	1			赤焼病の発生を助長することがあるため注意する。
7	予防		春期	チャノホソガ、チャノミドリヒメヨコバイ、カンザワハダニ	凍霜害を受けた茶園では、その後の新芽が不揃いになり、害虫が発生しやすくなるため、防霜ファンの利用等凍霜害防止対策を行う。	1			
8	予防		一番茶開業期	ツマグロアオカシミカメ	増殖・飛来源となる園地内及びその周辺の雑草や樹木を除去する。	1			
9	予防	防除	一番茶収穫後	クワシロカイガラムシ	多発茶園では一番茶摘採後に中切り更新し寄生部を除去するとともに樹勢回復を図る。	1			
10	予防		一番茶・二番茶収穫後	アザミウマ類	一番茶後の中切りや二番茶後の速刈りの直後に、1.0mm目合いの白色防虫ネットを樹冠面へ直接被覆したり、成園において、樹冠面への赤色防虫ネットのトンネル被覆を行うことで、被害の軽減を図る。	1			
11	判断	防除	二番茶収穫後	炭疽病	二番茶収穫後にせん枝を実施し、以後の発生を抑制する。	1			
12	予防		通年	病虫害全般、雑草	施肥基準を遵守し、土壌診断による施肥管理や生育診断を実施する。窒素過多を避ける。	1			
13	予防		通年	病虫害全般、雑草	除草剤のみでの雑草管理では土壌が流亡しやすくなるため、緑肥植物等の植付けによる風食防止や、傾斜ほ場下部へのグリーンベルトの設置により土壌流亡の防止に努め、土壌流出・流入による病虫害、雑草の拡散を防止する。	1			
14	予防		通年	チャノキイロアザミウマ	茶園周辺に、寄主となる植物（イヌマキ、シキミ等）を植栽しない。	1			
15	予防		通年	炭疽病、もち病	園地内に日陰が生じないよう、可能な限り周辺林木の伐採や枝管理を行う。	1			
16	予防		通年	病虫害全般、雑草	ほ場と周辺の雑草の状況（草種、発生量）、病虫害の発生状況を把握する。	1			
17	判断	防除	通年	病虫害全般、雑草	都道府県が推奨する要防除水準等がある場合は利用する。防除が必要と判断された場合には、確実に防除する。	1			都道府県では防除が必要か否か判断するための要防除水準や係る調査方法を定めており、農家段階で防除が必要か否か判断が可能な病虫害がある場合には、当該病虫害を新たに実践ポイントとして追加することが望ましい。この場合、都道府県が推奨する防除方法も含めた実践ポイントとすることが望ましい。
18	予防		通年	チャノミドリヒメヨコバイ、チャノホソガ、チャトゲコナジラミ等	【重要】摘採、整せん枝、裾刈り等を実施し、病虫害の密度低減を図るとともに薬剤をかかりやすくする。	2			
19	予防		通年	クワシロカイガラムシ、チャトゲコナジラミ	農機具に付着して分散する可能性があるため、摘採や整枝等管理作業で伝播しないように十分注意する。また、産卵期から幼虫孵化期に摘採作業を行う場合には、発生が多い茶園は最後に行うようし、茶袋を別のものに変える。	1			
20	予防	判断	通年	チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマ	新芽生育期の発生状況を把握し、防除の要否を判断する。	1			
21	判断		通年	病虫害全般、雑草	【重要】病虫害防除所が発表する発生予察情報等を確認する。発生予察情報等を参考に、園地の見回り等により早期発見に努める。	2			現在、農家に提供している発生予察情報や地域の予察情報等のメーリングリスト登録や当該情報をファイルする等、利用したことが確認できる場合に点数を付けることができる。
22	判断		通年	炭疽病、もち病	伝染源の密度や感染期の降雨状況さらには品種の抵抗性度合いを考慮し、防除時期を判断する。	1			
23	判断		通年	ハマキムシ類、チャノホソガ	地域内あるいは近隣地域に設置された予察灯やフェロモントラップの成虫誘殺状況を把握し、防除時期を判断する。また、チャノホソガについては、新葉や新芽への産卵状況に注意する。	1			
24	判断		通年	クワシロカイガラムシ	寄生枝の直接観察、粘着シート又は発生予察情報等により幼虫のふ化最盛期を把握し、防除時期を判断する。	1			
25	判断	防除	通年	輪斑病	感受性の高い品種については、摘採あるいは整枝の1日後までの通年に防除する。	1			
26	判断	防除	通年	カイガラムシ類	クワシロカイガラムシのふ化期に、茶の枝が常に濡れた状態になるように、スプリンクラーで断続的に2週間程度散水する。	1			散水に十分な水量が確保できることが前提となる。
27	判断	防除	通年	ハマキムシ類等	ハマキムシ類の対策として昆虫病原性ウイルス剤（GV）を使用する。チョウ目害虫の対策としてBT剤を使用する。	1			

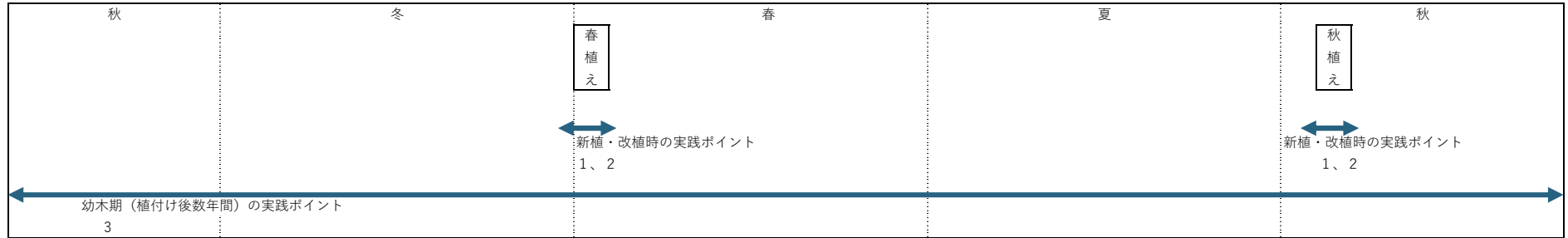
総合防除実践指標モデル（茶）

番号	予防	判断	防除	時期	主な対象病害虫・雑草	実践ポイント	点数	チェック欄		指標作成時の注意事項
								実施目標	実施状況	
28			判断	防除	通年	病害虫全般、雑草	2			各都道府県の病害虫防除所等で把握している薬剤抵抗性並びに栽培環境等の状況から、その農業の使用を控えることが望ましい場合は、当該農業の種類や作用機構分類（RACコード）を明記する。発生世代が把握可能な害虫においては、「同一系統薬剤の連続使用を避け」は「同一系統薬剤の連続世代への使用を避け」に読み替える。
29				防除	通年	ハマキムシ類	1			大面積の処理が有効であり、小規模の処理では効果が期待できないため、可能な限りまとめて（50a～）導入することが望ましい。
30				防除	通年	クワシロカイガラムシ、カンザワハダニ、チャトゲコナジラミ	1			天敵に影響が少ないといわれる農業でも、天敵群によっては影響を受ける場合がある。また、悪影響があっても残効性が短いため、天敵の活動への影響が少ないものもあるので、農業の散布時期と特徴を考慮して剤を選定することが望ましい。なお、生物農業の防除効果は施用法や病害虫の発生量等による影響を受けやすいので、剤の特徴を十分把握して施用することが望ましい。
31				防除	通年	雑草	1			
32					通年	病害虫全般、雑草	1			作物の生育及び病害虫・雑草の発生状況に合わせ、被害を確実に抑えながら、薬剤の使用が最小限となるよう、使用基準（希釈倍数、使用液量、使用時期等）に従って農業を適正に使用する。農業散布を実施する場合には、適切な飛散防止措置を講じた上で実施する。散布の際は、早朝か夕方等の無～微風時を選んで行う。
33					通年	病害虫全般、雑草	2			【重要】各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、栽培管理状況、農業を使用した年月日及び場所、使用した農業の種類又は名称、単位面積当たりの使用量又は希釈倍数等を作業日誌として記録する。
34					通年	病害虫全般、雑草	2			【重要】都道府県や農業者団体等が開催する病害虫・雑草の総合防除に関する研修会、農業の適正使用に関する研修会等に参加し、適切な防除に必要な情報等を入手する。
							合計点数			
							合計実践ポイント数			
							評価結果			

(別表) 総合防除実践指標モデル(茶)の各実践ポイントの実施時期

※生育ステージは静岡県を想定

新植・改植園(幼木園)



通常管理園

